

# ナメコの新品種「シロナメコ（仮称）」 について

青森県林業試験場 研究管理員 中里 康和

## 1 はじめに

青森県のナメコ生産は、昭和50年前半をピークにして、ここ十数年来、千トン前後の生産量で推移しており、その間、生産者数は五百人から百人前後に減少した。この原因は、ナメコ生産が加工用から生食用へ転換したことに対する取り組みの遅れにあると考えられる。その結果、加工用のなめこ生産を目的とした複合的季節栽培的生産が主であった生産者が廃業したと考えられる。

また、ナメコの消費量も、ここ数年横這いであり、価格も低迷している。

このような現状は、ナメコに限らず、どのきのこでも同様であり、きのこ生産者は新しいきのこや品種を要望している。

それに答えるために、当林業試験場において新品種を開発したので、報告する。

## 2 新品種の開発の経緯

この新品種は、昭和50年に、ナメコ生産者の発生舎で、突然変異により発生した、白色のナメコを育種母材にして、試験栽培行い、良品質なきのこを選抜して固定したものである。

これまで、一般に突然変異による白色ナメコの系統は、先祖帰りしやすく、着色してくる傾向があったが、この新品種は、繰り返し栽培試験を行っても、白色のままである。

発見当初の系統は奇形のきのこの発生率が高かったが、選抜育種した結果、この新品種では、形状が普通のナメコと差が見られない。

そこで、今年度末までに、この新品種を、品種登録することになった。

## 3 新品種の特性

外見的特性は表一のとおりであり、きのこ全体が、これまでのナメコと異なり、白色である点が大きな特徴である。

食味は、普通のナメコに比べて、淡泊な味である。ヌメリも少なく、ナメコとして食するなら、やや物足りないと感じられる。しかし、現代の嗜好が、きのこに限らず、淡泊なものへと変化してきていることから、むしろ、新品種のような食味が好まれてくると考えられる。

## 4 新品種の栽培方法

新品種もナメコの一品種であるから、基本的には、現状のナメコ栽培と同様に栽培できる。

原木を使用する場合は、これまでの栽培方法と全く同様であるが、発生量は普通のナメコに比べて少ない。

オガクズを使用した菌床栽培では、広葉樹（ブナ、ナラ）のオガクズを用い、スギのオガクズは適さない。添加する栄養剤は、コーンブランと米糠の混合使用が発生量が多い結果が得られている。混合割合は、容積割合で、オガクズ10に対して、栄養剤を1つつ加えると良い。

容器は、袋やブロックなど、きのこが発生するためには、培地表面積の広い方が良い。

瓶では、培地表面積が狭いことと、加湿した水分が滞留しやすいことから、適さない。

殺菌は、従来どおり、高圧殺菌なら121℃で60分間、常圧殺菌なら96℃位で2時間行う。

接種は、培地表面が全部覆われる程度に種菌を散布する。

培養は、23～25℃の温度で、90日間行う。60日間の培養でもきのこは発生するが、個数が少なく、出荷規格に合わない大きさになりやすい。

発生操作は、10℃前後の低温処理を行うと、発生量が多く、20℃では、きのこの発生が見られなかった。きのこが発生し、採取できる大きさになるまでは、40日程度かかり、これまでのナメコに比べて15日程度長くなる。

発生期間中の温度は、10～15℃が適している。湿度は、ほぼ100%に維持すると共に、通風による乾燥を防ぐ必要がある。

培地作りから、きのこの採取終了までは、6ヶ月間を要し、これまでのナメコに比べて、栽培期間が長い。

## 5 おわりに

この新品種の大きな特徴は、白いきのこであるということであり、他に見られない。また、食味も淡泊で、現代の嗜好に適している。これらのことから、商品価値の高い有望な品種と考えられる。

今後、品種登録され、本県で生産されるなら、他県では生産できない、特産品としての価値も大きいと考えられる。

表一 「シロナメコ（仮称）」の形態的特徴

	「シロナメコ（仮称）」	栽培ナメコ
傘の色	純白色～淡黄色	淡褐色～茶褐色
傘の形	円形～不整形	円形
傘のヌメリ	少ない	顕著で多い
傘肉の色	白色	淡黄色
ヒダの色	白色で、変色しない	淡黄色～褐色に変色
柄の色	白色	淡褐色～茶褐色
柄の形	円柱状～杭状	円柱状